

木

の

葉

色

の

し

ポ

ー

ト

小

幡

佳



木の葉色のレポート

1996年10月28日初版第1刷

著 者 小 幡 佳 一
装画、装丁 小 幡 佳 一
発 行 者 大 幡 信 一
発 行 所 浜名アローン出版
浜松市半田町4914の66
郵便番号 431-31
電 話 (053)433-6167
印 刷 所 株式会社シバプリント

ISBN 4-9900530-0-1

木

の

葉

色

の

レポート

小幡佳



木の葉色のレポート

目次

雪の上の花嫁	7
追憶の散歩道	42
遥かなヒマラヤ	73
花の絵	106
霧の道に立ち	146
あとがき	168

雪の上の花嫁

正雄は残雪の上に立っていた。あたりには這松が群生し、彼の近くに仲間たちもいる。青空を背景に遠くの方々の頂きにも残雪が白く光る。

彼らがいる所は広々としているが、少し歩くと、やがてのぞき込むような急な崖となり、深い谷へと向かっている。

五月下旬の、真夏を思わせる強い日差しが残雪に映え眩しい。岩山が雪の衣を所々に光らせてそびえ立つ。眼下をいくつかの小さな雲がゆつくりと流れて行く。その下には帯状の、新緑の平野が霞んで広がる。所々に村か町らしい模様が見える。

彼方の、高い山脈の白い稜線を越えてきた風は、冷たい。

十数メートル先に大きな岩が立っている。

「風は冷たいが……二人は熱すぎるから、ちようど良い……」

正雄は、その岩を見ながら隣の孝幸に言った。大きな黒い岩には植物が全く生えていない。

その岩陰にいるはずの悦子は、なかなか出てこない。

「何を手間取っているんだ……」

孝幸は言った。

雪の上に三枚のシートが広げられ、隅にこぶし大の石が乗せてある。腰の高さほどの這松がいたる所で枝を広げている。花模様シートのの上には、アルミ箔の皿に盛られた菓子やウイスキーボトル、肉や果物の缶詰、夏みかん等が賑やかに並べてある。ガスコンロが、アルミ鍋の中のシチューをぐつぐつ煮る音も聞こえる。

十人の男女はもうやる事も無く、立ったり腰を下ろしたりしたまま談笑していた。

「きのうは、天気に関を揉んだけど、よく晴れたな」

健一が正雄に話しかけた。

「とにかく、山小屋の中でやらなくて良かった。……今日は最高だ……。しかし遅いな」

彼らは七、八人は隠れることができる岩を見ていた。

白い布が黒い岩陰から一瞬覗いて、また隠れた。それからすぐに、頭から胸までの小さな白いヴェールを纏った悦子が、笑みを浮かべて岩陰から現れた。みかんの花を頭飾りに付けている。傷まないように、紙箱に入れて持ってきた花だ。

待っている者の間から拍手が響いた。足元のテープレコーダーから、ボリュームをいっばいにした結婚行進曲が流れた。

悦子と利明は手を取り合い、這松の間を縫って、残雪の上を下ってきた。ヴェールの下には赤い模様のセーターを着ている。

途中で悦子は歩みを緩め、恥ずかしそうに笑った。人々の拍手の間を歩き、向きを変えてから、二人揃って身体を曲げて挨拶した。頭飾りの、みかんの白い花の、甘い香りが流れた。

「よう……お似合いだ。いいぞ」

良二が叫んだ。

利明と悦子を上座らしい所に並べて、全員は三枚のシートに座った。二本のウイスキーの栓が抜かれた。

「お待ちどうさま」と、明代が正雄のグラスにそれを注ぐ。

やがて、乾杯の喚声が、這松の茂みから流れ出た。

「正雄さん、もっとどうぞ」

明代が、シートに置かれた正雄のグラスに雪を入れ、それにウイスキーを注いで差しだした。

「うまく写ると思うが、現像してみるまで分からんぞ」

良二が、少しづつ場所を変えながらシャッターを押した。

新調した登山ズボンに青い防風衣を着た利明と、たっぷり時間をかけて化粧を済ませ、ヴェールを纏った悦子。山の仲間達。岩と緑の這松に、雪を戴いた山々とちぎれ雲。それらが良二の、撮影のセミプロを自認するテクニクでどう写されるのか、正雄は少し気になった。彼はウィスキーの雪割りにすっかり酔いが回った。良い天気になってほんとに良かった。と、また彼は思う。

その前日、彼らが麓に着いた時は曇っていて、時々雨がぱらついた。登るにつれて霧が深くなり、時には視界が十メートル以下になった。

「空がやきもちを焼いているのよ」

彼の後ろを歩いていた明代が言ったが、明日も悪いかと思うと、正雄は笑えなかった。その夜は、明日の天候を心配しながら寝た。

早朝、山小屋から外を覗いた者が、白みかけた空に残っている星を見て、喚声をあげた。

そしてその日の昼ごろ、二千メートルを少し越すならかな高原状の尾根を選んで、祝宴の準備にかかった。

悦子と利明は、りんどう山想会の古いメンバーである。

司会役は、話好きで声の大きい山想会会長だった。六年間にわたって彼が見聞きした二人

のエピソードは面白く、笑い声が沸き起こった。

会長自身は四年前に結婚している。彼の実家は、従業員が二十数人の菓子工場を経営している。経済上ゆとりのある彼の新婚旅行は、二週間もかけた西ヨーロッパ一周だった。

しかし利明の実家は事業に失敗し、借金もかさみ、破産寸前だと言われている。

そんな事情に恐れを抱いた悦子の両親は、この結婚に反対した。だが二人は気持ちを变えなかつた。

そして山仲間だけの、このささやかな祝宴が二人の結婚式だった。

山の残雪の上の明るい愉快なその情景は、正雄の心の中に焼き付いた。

その一ヶ月後、彼は数人の仲間と共に利明と悦子が住むアパートを訪ねた。愛想良く、もともと世話好きだった悦子には、何年も主婦を勤めているような雰囲気さえあった。

「実は……参加する女性がいなくて味気なくてな……おい……正雄……だからよ、力を貸してくれ……」

ずるそうな笑みを浮かべて正雄に頼みこんだのは隆行だった。利明と悦子が祝宴を挙げた日から四ヶ月経った、秋の初めだった。

正雄は電子機器の製造会社に勤めている。彼の会社には若い女性が多い。独身の仲間から、しばしば羨望の目でみられる。正雄にしてみれば、確かに楽しい事もあるが、女の多い職場は何かと噂の渦が巻いていて、かなり気を使う。

正雄は隆行の頼みを聞いて、紀代のりよと弘子に声をかけよう、と思った。

正雄は職場でよく紀代を見る。互いに仕事に忙しく、挨拶をしても、狭い通路ですれ違っても、風が通り過ぎたように気に止めない。仕事以外の話をする事があっても、それは冗談程度で、内容もすぐに忘れてしまう。

「そう……：正雄さんのお友達と一緒に……：」

彼女は隣の弘子に微笑んだ。

「ねえ、行ってみようかしら」

弘子は興味を持ったようだった。

枯葉に覆われた坂道は、細く曲がりくねって続いていた。卓也は、軽快な小刻みな足どりで下った。かさかさかさ……と彼は、軽い乾いた音の坂道を作り、快さそうだ。

十月中旬の森は、紅葉した白樺や楓が冷気に浸り、その色づいた衣の華やかさを競っている。

る。紅葉の梢の上に、深い青空が続いている。

正雄達七人のグループは、先頭と末尾が、声が届かないほど離れていた。

「俺はどちらかと言うと、落葉松からまつの紅葉が好きだ。白樺の紅葉も悪くはないが……………」

枯葉のリズムを緩めて、卓也が正雄に話しかけた。

「去年の秋だが……………俺が落葉松の林を通っていた時……………、ぱらぱらと、夕日が当たって金色の針がよ……………。本当に金色だった……………。音をたてて、あっちにもこっちにも雨のように降ってた……………」

「そうか、なんとなく、分かる。……………落葉松や白樺もどっちも良いけど、俺は腹が減ったよ」

二人は立ち止まり、後ろを振り返った。

「紅二点は遅いな……………。慣れてないから、仕方無いか。これだけピッチを落としているんだがな……………。しかし、まあいいさ」

卓也は笑いながら言った。

紀代は弘子と共に、三人の男たちの後に続いて、紅葉の枝が差し交わす坂道を下っている。彼女達のリュックは、中身の大部分を男達が分担したため、軽くなっている。

正雄と卓也の待つ所へ良二が歩いてきた。彼も立ち止まって遅れている紀代達を待った。

「なかなかよい娘だのお」

彼は正雄に言った。正雄は紀代達を待ちながら、隣に來た良二を見て、彼がバスの中で言った冗談を思い出した。

それは七人が山へ來る途中の、バスの中の事だ。バスは、山合いの小さなさびれた停留所に止まった。そこには十七、八才に見える女が一人いた。日本画美人を思わせる、頬にふくらと丸みのある娘だった。彼女は、ゆっくりとバスに乗り、運転手の後ろの席に歩いた。そして、前方の景色を見たまま座っていた。ふたつめのバス停で彼女は下車して、山村の砂利道を、形のよい腰を揺らせながら歩いて行った。

後部の座席にいた良二は、バスの中でその娘ばかり見ていた。彼女が降りてしまうと残念そうな顔つきになって

「いい女だなあ……よりによって、こんなへんぴな山の中に隠しておくたあねえよ。……俺がもらってやる。見る……俺の息子がこんなに膨張してやがる。この膨張の程度で、よい女かどうか判断できる」

そう言って隣の正雄の顔を見て、盛り上がった自分の股間をズボンの上から二、三回さすった。正雄は苦笑して彼の手を見た。

前の座席ひとつにおいて、紀代の後姿が有った。紀代の頭に軽く乗せた白い帽子の下で、肩近くまで垂れ下がった幾筋もの髪が、細目に開けた窓から吹き込む風に揺れた。頬から首にかけて見え隠れする白い肌が、正雄には眩しかった。

その半年後、正雄と紀代は、子供連れの家族が多い遊園地を、連れだって歩いていた。ジェットコースター、観覧車、回転ブランコ……十数種の施設が動いていた。紀代は、周囲の子供達のように楽しげだった。

昼食後、レストランの外に出て、二人は手をつないだまま、手すりごしに遊園地を眺めた。滑り降りるジェットコースターから溢れる喚声を聞きながら、肌をくすぐる快い五月の風に、紀代は髪を揺らせた。

その髪と白い首筋に、半年前のバスの中の後ろ姿を、正雄は思い浮かべた。

いつも見ている女達を紹介したつもりが、結局その一人と付き合う結果になった。そんなきっかけを作った秋の山だった。